

浄土真宗の葬儀(第1回)

最近、「葬儀は、身内だけで簡単に済ませました」と語られる方がいます。

少し前までは、「亡くなった」と聞けば、それは「一大事」でした。葬儀は、ご縁の深い方々、ご近所、友人、会社関係の皆さんで協力し合い、丁寧に時間をかけ見送ってきました。

南加賀の葬儀は、みんなで葬儀に関わり、精進料理の賄いは女衆おんなしゅうが作り、皆でお勤めをし、送り出しました。そして葬儀だけでなく、満中陰まんちゅういん(四十九日)まで精進をしてきました。

今の葬儀の流れは、何か大切なものまでも簡略化しているように思います。

この機会に葬儀について、毫攝寺住職ごうしゃつじ出雲路修氏いずも し おさむ(大聖寺荒町)に3回に分け、お話しをお願いしました。



「送る」とは

どういうことなのか？



出雲路 修 氏
(毫攝寺住職)

あるときは

ありのすさびに語らほで

恋しきものと別れてぞ知る

『古今和歌六帖』

残念ながら、多くのばあい、わたしたちがその人にほんとうに出合うのは、その人の亡くなった時なのです。

その人のことを知っているようでほとんど知らなかった自分がいいます。その人のことなど真剣に考えてこなかったわたしがいます。その人はこんな人なのだ、という思い込みによる決めつけが、あります。

その人の死は、否応なしにわたしにその人のことを考える機会を与えてくれます。わたしの思いの枠をこえたその人の意外な一面を知ったり、その人に対しての思い込みが訂正されたり、あの時のあの発言やあの行動の真意がわかったり……。ああ、そうだったのか、と今になって思い当たることがあります。今までその人の思いを十分に受け止めてこなかったこと、あれこれと多くの後悔の思いが去来きらいします。

■死なれてはじめて

その人に出合う

長い長い人生もあれば、生まれて眼を開くこともなく過ぎ去ってしまった人生もあります。どのような人生であれ、その人生にわずかながらでも触れ合ったわたしです。その人に対してもっと別の生き方があったかも知れません。その人が死んでしまったその時にやっと、その人の果たされなかった

願いや、その人の心の深奥しんおうの思いが、伝わって来るのです。「死なれてはじめてその人に出合った」ということなのです。

■死を受け止める

日本語には、「死なれる」といった受身表現があります。「わたしは、誰それに死なれた」と、他者の死を、自分を主語として、自分自身のこととして表現するのです。その人の死を「わたしには関係ないわ」ではなく、自分のこととしてとらえたとき、わたしたちは、多くの大切なことを学びます。その人を「送る」とは、自分のこととしてその人の死を受け止めることなのです。

「人は死ぬのだな」から始まって、その人の人生、さまざまな思い出、その人の思いを十分には受け止めてこなかった悔恨かいこん、時の過ぎ行く速さ、「死」の意味、など、さまざまな思いが点滅し、自分自身のことにも思いがおよび

ます。その人の死を受け止めることによってわたし自身が照らし反^{かえ}されるのです。わたし自身を発見するのです。

■ 仏に出合う

わたしたちは、身近な人の死によって、大切なものを学ぶのです。その人の生きているときには気づかなかった大切なことに、気づくのです。そしてそこに、自身への問いかけが突然おそいかります。「わたしの人生は、これでいいのだろうか？」という疑問が湧きおこります。

これが、「その人を送ったときに、仏に出合う」ということなのです。

■ 死者こそがよき導き手

聖^{せい}覚^{かく}『唯^あ信^い鈔^{しんしやう}』に「われおくれば人にみちびかれ、われさきだたば人をみちびかん」とあります。生者は死者に導かれ、死者は生者



を導く、ということなのです。亡くなったその人こそがわたしを導く人なのです。

その人が亡くなったその時に、わたしたちはその人に出合います。その人の死に思いをいたす時、わたし自身が照らし反されて、わたしは仏に出合います。

その日から、わたしの大切な時が刻まれていきます。

一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、…これは亡くなった人の年が刻まれるものではありません。

送ったわたしの年が刻まれるのです。その人を送って一年経った地点にいるわたし、その人を送って二年経った地点にいるわたし、…。

亡くなったその人の死を起点としての、わたしがその人に導かれて歩み始めてからの年が、刻まれるのです。

旧来の説教では、

「さきだちて

逝^ゆきにし人はみ仏の

我^わを導^つく使^{つか}なりけり」

「夢の世に

あだにはかなき身を知れと

教えて帰る子は知識なり」

〔「知識」とは、友人のこと。 仏への道をともに歩む仲間〕などと

されて、死者こそがよき導き手であると説かれてきました。身近な人の死こそ、わたしを大きく変えて目覚めへの道を歩ませるものなのです。

今わたしは、その人に導かれて歩み行く人生を、たどるのです。

■ 目覚めへの道

「葬儀」とは、わたしが人を送ること、どこまでも「わたし」の

おこないであって、人に送ってもらうことではありません。わたしのこととしてその人の死を受け止めることから始まる、大切な一歩なのです。

蓮如上人のご葬儀には、三首のご和讃が詠じられました。

一首めは、「無始流^{むしる}転^{てん}の苦をすてて…」、二首めは、「南無阿弥陀仏の回向^{えこう}の…」、三首めは、

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
ほねをくだきても謝すべし

蓮如上人を師主（導いてくれた先輩）知識（ともに歩む仲間）と受け止め、しかもその背後に目覚めた世界を見出しています。門徒たちが蓮如上人をどのように受け止めたのが、うかがえます。

わたしはいま亡くしたその人どのように送るのでしょうか？そこにこそわたしの目覚めへの道の歩みがあるのです。

わたしたちの仏教は どのような仏教なのか？



いす ち じ おさむ
出雲路 修 氏
(毫端寺住職)

■ 釈迦のおしえ

仏教では、「目覚めて生きる」「目覚めた人になる」ということが目標とされます。釈迦はその目標を達成して目覚めた人となったとされました。

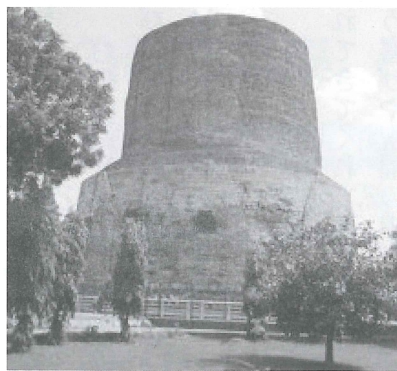
「目覚めた人の死をわたしたちはどのように送ればいいのか」と弟子の阿難が釈迦にたずねたことがあります。その答えが経典に記録されて残っています。（『長部経典・第一六経』）

①出家修行者はそういったことにかかわらずことなく、目覚めた人になるためのみずから修行に専念しなさい。

②在家の者は、目覚めた人をこの地上世界の帝王のごとくにして送り、その遺骨を納める塔を建てて、礼拝しなさい。

右の①②が釈迦の答えとされています。パーリ語の経典、サンスクリット語の経典、古い時代の4種の中国語訳の経典、どれを見ても、叙述の重点は②にあつて、分量も①と比べてはるかに多く、「このように葬りなさい」と、目覚めた人の葬り方が実に詳しく細かく書かれています。そして死後、言葉ごりのやりかたで釈迦は葬られました。

ところが、驚いたことに、「このように葬りなさい」と葬り方を説いた釈迦の言葉が、現代では葬式否定の言葉とされてしまったのです。パーリ語の経典を伝えてきた上座部仏教（むかしは小乗仏教と呼ばれていた）の教えこそが正しいとする仏教学者たちは、せっかく①②を見ても②をことさらに無視し、「釈迦は葬式を否定した」としきりにアピールするようになりしました。②でなく①を、出家修行者ではない人たちまでもが自分に向けた言葉として受け止めたのです。



釈迦の遺骨を納めた塔
【インド サールナート】

人・文化人のファッションになつてしまいました。

■ 大乘仏教・在家仏教

しかし、実際には、在家のわたしたちに対しては、釈迦は②を説いたのです。

それ以後の仏教史を見ると、②に述べられたような仏塔信仰から大乘仏教が發展し、わたしたちの仏教へと展開して来ました。②は大乘仏教の芽生えの段階をうかがわせる、たいそう貴重な記録なのです。

その影響で、経典にどう書かれていたかをも問題にせずに、「仏教が葬式にかかわるのは墮落だ」と発言することが知識

また、一七世紀の『しんらん記』という浄瑠璃には、「親鸞聖人が結婚して真宗という法が確立した」と述べられています。民間芸能の浄瑠璃でさえも、真宗は出家仏教を否定したところ

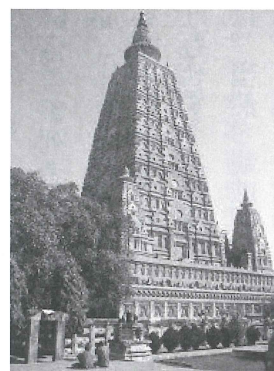
とは忘れてはならないことなのです。

わたしたちが受け継いでいる仏教は、大乘仏教の、しかも在家仏教の真宗というおしえなのです。いまさら上座部仏教の出家修行者向けのおしえの正しさを強調されても、困惑するばかりです。わたしたちは、上座部仏教のさまざまな問題を乗り越えて歩んで来た地点に立っているのです。

■目覚めへの道

目覚めへと進みゆく道について、その初級者ともいべき人たちに「声聞」「縁覚」といったあり方が、古くから説かれてきました。

「声聞」は「言葉を手がかりにして教えを聞いて学ぶ道」であり、「縁覚」は「体験や感覚を手がかりにして目覚めへと進む道」なのです。



釈迦悟りの聖地
【インド ブッダガヤ】

そして、重要なのは、「縁覚」は「声聞」よりも一歩すすんだあり方とされて来たことなのです。学問・教養として学ぶ仏教よりも、体験によって受け止める仏教のほうが目覚めへの道を一歩すすんでいる、とされたのです。

親鸞聖人も、「体験や感覚より生ずる信（思より生ずる信）」を、「知識より生ずる信（聞より生ずる信）」よりもすすんだあり方としています（『教行信証』聖典230ページ）。

教養としての仏教よりも、大切な人の死を起点とする仏教こ

そが重要ということでしょう。

■死と仏教

「目覚めた人」は、インドの言葉で「ブッダ」と言います。中国ではそれに漢字をあてて「佛陀」としました。その「佛陀」は、現代の中国語で「フォトウオ」。日本語の「ほとけ」はこのあたりが起源でしょう。

死者を「ほとけ（目覚めた人）」と呼ぶのは日本だけだとされます（櫻部 建）。わたしたちの仏教を考える大きなヒントになります。

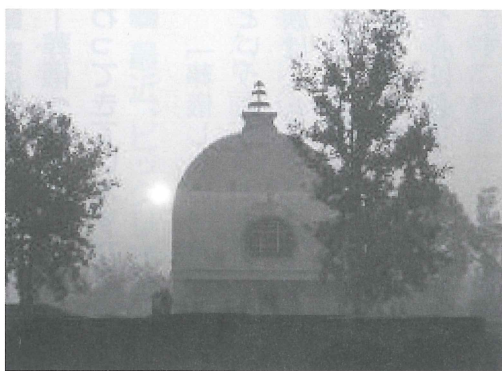
その人が亡くなったその時に、わたしたちはその人に出合います。その人の死に思いをいたす時、わたし自身が照らし反されて、わたしは仏に出合います。

その日から、わたしの大切な

時が刻まれていきます。まわりの風景さえも、わたしをつつむ空気さえも、その人の死が大きく変えてしまします。わたしは、その人を「ほとけ（目覚めた人）」として敬い、新しい時を歩み始め歩み続けるのです。

これがわたしたちの仏教なのです。死者をわたしを導く「ほとけ」として敬う、ということを中心として歩みます。

ほとけに手を合わせるところから歩み始める仏教なのです。



釈迦入滅の聖地
【インド クシナガラ】

第二回

送られる人



いずも じ おさむ
山雲路 修 氏
(毫攝寺住職)

「健康」指向の悲しさ

医療に依存してやっと保たれている生命に対して、「つらいだろうな。あのような生き方は嫌だな」という思いを抱く人は多いのですが、だからと言って、「そのような生命は存続させてはならない」などと考える人は多くはないでしょう。

しかし、医療に依存すること無く最期を迎える生き方を「尊厳死」と呼んで、それを理想とする考えが現代さかんに呼びかけられています。これは、医療に依存してやっと保たれている生命に対し「あなたの生き方には尊厳がな

い」と裁断してしまおう、「冷酷な鈍感さ」に基づいた提唱に過ぎません。

この、神のごとき傲慢さは、釈迦が「聖ならざるものの探求」(『中部経典・第二六経』)にすぎないとして否定して退けた「健康の驕り」「若さの驕り」(『増支部経典・三・38、39』)に他なりません。

また、どうせ死ぬような者におカネをかけるべきではない、といった資本主義経済のリクツが大きな市民権を得ています。「どうせ死ぬんでしょ。無駄な出費はおさえましょう」と。



釈迦が『無量寿経』、『観無量寿経』を説かれた地
【ラージギル・霊鷲山】

医療に依存してやっと保たれている生命を、そのこと自体を理由として惨殺する事件もありました。「尊厳死」の提唱からの距離は、決して遠くはありません。医療に依存して保たれている生命のありかたが排斥される時代、「健康」指向の時代なのです。天皇も「健康が維持できないので」と退位するのです。

これほどまでも「健康」指向なのは、『健康』でない者は社会的に無用で、『健康』であってはじめて社会的に有用な者となれる」と考えるからでしょう。「社会的に有用であるか無用であるか」が根本的な判断基準なのではないか。

「自分は社会的に有用だ」というトンデモ自信家が他人を「無用」と決めつけて排除する時代になりました。

数年まえにJAAROのメッセージとして、「わたしは社会に対して何も大したことはしてこなかった。だから死後、臓器移植



釈迦最後の旅の地
【ヴァイシャリ】

のドナーになって社会に貢献したい」という趣旨の言葉がテレビで流れたことがありました。臓器移植推進のための放送でしたから、「社会に対して何も大したことをしてこなかった人生は、何か償わなければならぬ人生だ」「無駄飯を食って来たやつは、臓器提供でおとしまえをつける」などといったムチャクチャな考えが平然と放送されたということなのです。しかし、これが問題視されたということは聞いていません。受け入れる社会になってし

まったのでしよう。

「おまえは社会に対して何も大したことをして来なかった」と決めつけられ断罪されることは嫌なものです。

健康でないならば「社会的に無用だ」と烙印を捺されてしまします。そうなることを嫌って、誰もかれもが「健康」をめざします。「わたしはまだ元気だ」「わたしはまだ若い」「わたしはまだ稼げるぞ」「わたしはまだ社会的に有用だぞ」と、この社会から無用な者として排除されないようにと、痛々しいまでの「健康」指向です。

老・病・死

老人を見ては「あの人だけが老いるのか？人はみんな老いるのか？わたしも老いるのか？」と問い、病人を見ては「あの人だけが病むのか？人はみんな病むのか？わたしも病むのか？」と訊ね、死人を見ては「あの人だけが死ぬのか？人はみんな死ぬのか？」と

たしも死ぬのか？」と聞き、「自分もまた古い、病み、死んでゆく身なのだ」と知った青年釈迦の、家を出る決断が「仏教」の第一歩であったことは、さまざまな経典に描かれています。



釈迦が初めて死人に会った地
【カピラ城西門】

現代社会は、老人、病人、死人に日常生活で接することの無い社会です。だけど、老人、病人がかなり多数を占めているのですから、たとえ若くても、大きな病気に罹ったことがなくても、その気になれば青年釈迦と同じ気持ちになることは困難ではあり

ません。しかし、現代ではみんなが、とくに老人たちが、目を瞑り耳をふさいで、必死になって、気がつかないふりをして生きているのです。無用な者の世界として排除してきた世界へ自分たちが転落することを恐れての、老人たちの「若いぞ」「健康だぞ」とアピールする悲しい姿が溢れています。

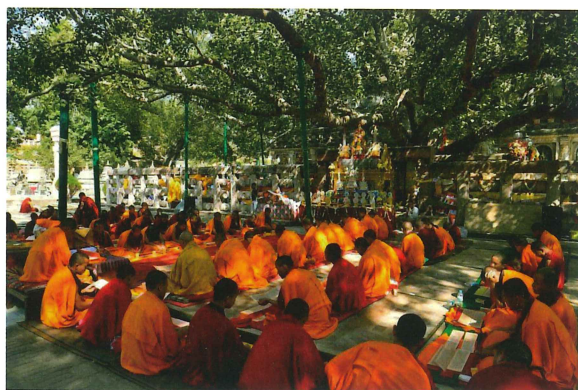
老・病は、社会的に無用な者の世界であり、死はさらにその究極である、と考えて、死の世界へと「転落」しないようにと必死になっているのです。

このような、死のとらえかたが、亡き人の「送りかた」をわからなくしているのです。

見る

なにものをも排除せずになにもの社会をしつかり見ると、そこからすべてがはじまります。

わたしたちの社会は、よく見る



釈迦が悟りを開いた地
【ブッダガヤ・菩提樹の下に集う人々】

と、若い者もいれば老人もいる、健康な者もいれば病人もいる、といった色彩豊かな社会なのです。それに気づくだけでわたしたちの生き方が少し変わるのです。ちよつと立ち止まってぐるっと見回すだけでいいのです。そして自分の足もとを見つめた時、そのとき、「自分の死」に思いいたり、「大切な人の死」に、思いいたるのです。

「送る」ということの意味がここにあらわれて来るのです。